

---

# 陽だまり

徳次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陽だまり

### 【Nコード】

N2110B

### 【作者名】

徳次郎

### 【あらすじ】

飼っていた猫が死んだ。沈んだ心の千里の前に現れた一匹の猫。それは、死んだ自分の猫にあまりにも似ていた。向かいのアパートの住人が飼うその猫に会う為に、何時しか彼の部屋へ行き来するようになる千里。一緒にいてもまったくときめかない彼から、ある日突然引越しを告げられた時、彼女は自分の内に芽生えていた思いの大きさに気付くのだった。少女が少しだけ大人へと成長する切ない物語。

【第1話】（前書き）

全4話の短期連載です。

## 【第1話】

あたしのネコが死んだ。

中学の時に、学校帰りの河原であたしが拾って来たのだ。まだ、両手の平に乗るほどに小さかった。

名前は無かった。特につけていなかったのだ。だって、ネコは、犬と違って呼んでも来ないんだもの。

でも、あのネコはちよつと違った。

あたしが落ち込んでいる時、寂しい時、そんな気持ちがかかるのか、何時も傍にきて体を寄せてくれた。

何時もは、お腹の空いた時しか寄って来なくて、あたしの顔を見ても煩わしそうに「にゃあ」と言うだけで、シッポを振るわけでもない。

なのに、あたしが寂しい思いに呑み込まれ、暗く落ち込んでいる時は、静かに部屋に入ってきてあたしに寄り添うのだ。

晶子と喧嘩して絶交寸前になった時も、秀二と別れた時だって、何時もそうだった。

ネコを最後に見かけたのは、昨日の夜ご飯をあげた時。

昨晩は父も母も出かけていなかった。

あたしが冷凍食品の夕飯を食べようとしていると、何時ものように右足にまとわり付いて「にゃあ、にゃあ」と鳴いた。

彼の鳴き声を聞いたのも、アレが最後だ。

たぶん、昨晩遅くに車に跳ねられたのだと思う。

朝、学校へ行こうと外へ出たら、ネコは冷たい骸となってアスファルトに横たわっていた。

タイヤで引かれたわけではないのだろう………体は潰れていなかった。ただ頭から血が流れて、小さな血溜まりが出来ていた。

鬼のように車高の低い車の、下回りにでも引っ掛けられたのかもしない。

あたしはその日、学校へ行くのを止めて、庭にネコのお墓を造ってあげた。

何かに取りつかれたように、ひたすら庭の片隅に穴を掘った。気が付くと、小さな園芸用のシャベルで30センチもの深さを掘っていた。

そつとネコを横たわらせ、静かに土をかけた。

穴を掘っている間も、土を埋めている時も、あたしは奇妙な使命感に囚われて半ば事務的に作業を進めた。あまった土を使って、塚を造ってあげた時、初めて寂しさが沸き起こり、心の奥にぽっかりと空いた大きな隙間を、冷たい風が吹き抜けた。

あたしの寂しさを、誰よりも判ってくれたネコ……………

「bye-bye」

柔らかい土の上に雫がこぼれ落ちて、真つ黒な手で拭った頬は、忽ち土だらけになった。

ネコがいなくなってから一ヶ月が過ぎた。今でも、あたしは、風で庭の草木がそよんだり、何かの拍子で部屋の空気が動くと、ハツとして振り返ってしまう。

気ままにうろついていた、あの小さくて無邪気な獣は、もうこの家にはいないのだ。

「ほら、早くしないと遅刻するわよ」

母があたしに言った。

もともと食べるのが遅くて、いつも朝食の途中で出かけていたあたしは、自分が世話をしなければならぬ存在がこの家から消える、と、ますますのろまになって、毎朝母親にせかされる。

いそいそと半分齧ったトーストを置くと、そのまま鞆を持って玄関を出た。

庭で、ガサツと音がした。

あたしは直ぐには振り向かない。どうせ風の悪戯だ。  
再び音がして、何かがブロック塀の上に飛び上がるのが見えた。  
あたしは瞬きもせず、その物体を見つめた。

綺麗な黒と茶色のトラジマで、シッポの先と左の後ろ足の先が真っ黒。

あたしのネコ……………

「戻ってきたの？」

こちらをじっと見つめるネコに、あたしは思わず声を掛けた。

「やあ、すまないね」

誰かの声がして、塀の外側から、そのネコを抱かかえた。

あたしは、ただ目をぱちくりと見開いて、彼を見つめた。

「この家の人？」

「あ、はい……………」

中肉中背、何処にでもいるような平凡な顔の青年が立っていた。

「これ、うちのネコなんだ」

彼は最近、向かい側のアパートへ引越して来たらしい。

「ネコ、好きなの？」

「え、いえ……………ハイ」

戸惑いながら、あたしは応えた。良く見ると、あたしのネコよりも、一回り小さいかもしれない。

あたしは、それを言われるまで全然気にした事がなかった。

学校から帰ると、二階の部屋へ行って普通に着替える。制服の上着もスカートも無造作に脱いで、時にはそのまま下着姿でクローゼットを物色する。

向かい側にあるアパートは、こちらに向いている部分が北側だから、通路とドアしか見えない。だから、まったく気にした事も無く、あたしは着替える時、いちいちカーテンを閉めたりしなかった。

「ねえ、キミ」

ある日の夕方、向かいの住人である、あのネコの飼い主に声を掛けられた。

あたしはポカンとした顔で振り返った。

彼はネコを抱えていて、あたしの気はどうしてもその腕の中へいっつてしまう。

「キミ、着替えの時、カーテン閉めた方がいいよ」

「えっ」

あたしは、一瞬、その意味が判らず、それでも着替えと言っ言葉に反応して、顔を紅潮させてしまった。

「いや……………この二階の通路からキミの部屋が丸見えだから……………だから、その、危ないなあって」

そういいながら、彼の顔もアツと言っ間に赤くなった。それが、どう言っ事なのか察したあたしは、ますます顔から火が出る思いだった。

この人はきつと、悪意は無かったとしてもあたしの着替えを見ているんだ。

「こ、これから、気をつけます。ごめんなさい」

あたしは何故か謝っつて、その場を駆け出した。

自分の部屋に入ると、真っ先にカーテンを閉めた。

## 【第2話】

翌朝、学校に行こうと玄関を出たら、あのネコが庭をうろついていた。

「どうしたの？お腹でも空いた？」

ネコはあたしに寄ってきて、喉を鳴らした。

一度家の中に戻って、キャットフードの缶詰を与えた。

あたしは、ネコがキャットフードを頬張る姿を何時までも見つめていた。つい、食べ終わるまでその様子を見ていた為に、その日は学校に遅刻した。

夜になると、再び庭でネコの鳴く声が出た。

「あら、何処かのノラかしらね」

母親が、リビングから外を覗きながら言った。

あたしはネコ缶を一つ持って、こっそりと外へ出た。

何時もは星なんて見えないのに、ほんの数粒の薄っすらとした星の輝きが、殺風景な夜空を飾っていた。

翌日の朝、玄関を出ると、またあのネコが来ていた。

思わずあの飼い主が住むアパートの206号室を見上げた。

あの人、いないのかしら……

「あれ？」

門の入り口から声がした。

「こんな所にいたのか」

彼は、頭がボサボサで、大きな鞆を提げていた。

「昨日、急な出張があつてさ。今帰って来たんだ」

「昨日もここでご飯を食べたんですよ」

「いやあ、ネコの本能で何とかするとは思ってたけど。キミの所へ来たんだね」

彼は頭をかきながら笑った。

彼はカメラマンのアシスタントをしていると言う。スタジオカメラマンだから、ほとんど都内を出ることが無いそうだが、時々出張があるのだとか。

「じゃあ、その時は、あたしが面倒をみますから、言って下さいね」  
あたしはそう言って、急な時の為に、携帯の番号も教えて学校へ向かった。

ある日学校から帰ったあたしは、最近いつもするようにカーテンを閉めようと窓に近づいた。

向かいのアパートの、二階の通路。確かに良く見える。ここから良く見えると言う事は、向こうからもよく見えるのだろう。

ふと通路に目が止まった。左端に何かがある。何かの荷物だろうか。

バックのようなものは直ぐに判った。あれは、この前彼が持っていたバックだ。その大きなバックと並んで大きな影が見える。

アレは何？

あたしはハツとして目を見張った。あれ、人だ。誰かがあそこに倒れているのだと気付いたのだ。

急いで部屋を出て、階段を駆け下りると、向かいのアパートに走った。

アパートはあたしの部屋から見て、右から201と部屋番号がふつてある。だから一番左は、あの男の部屋206号室なのだ。

あたしは息を切らして階段を駆け上がった。

通路に倒れている人影。それに近寄ると、やはり彼だった。

その時、正直この男には興味が無かったと思う。ただ、ネコの主人がいなくなったら可哀相だし……… そのぐらいに思っていた。

「あの……… 大丈夫ですか？」

その声が聞こえたのかどうなのか、彼は微かに反応して、低く呻

き声を出した。

うつ伏せに倒れていた彼を、なんとか仰向けにすると、顔色は真っ青で、なんだかわからない汗をかいていた。

「大丈夫ですか？」

額に手を当てると、明らかに熱くて、熱っぽいとか、そんなのは全然判らないあたしにも、彼が異常な発熱を起こしている事は判った。

「カギはどこ？」

彼は「ううん」と唸るだけ。

「わかる？カギよ。ドアを開けないと入れてあげられないわ。部屋のカギは何処？」

今の彼には、あたしの質問は聞こえていないのかもしれない。

あたしは彼のポケットを探った。

「ごめんなさい」

ジーンズの前ポケットに手を入れるとき、思わず言った。ポケットの中がすごく熱かった。

早く熱を冷ましてあげないと。

後ろポケットにキーリングがあつて、三つのカギがついていた。アパートのカギは見て直ぐに判った。それを急いでドアに差込み、カギを開けた。

さあ、どうやってこの男一人を、女一人の力で部屋の中に運び込むか。

あのネコ……

なんでネコ？

ネコの手も借りたいなんて……役に立つわけないじゃない。

「わかる？立てる？」

あたしは、耳の遠いお婆ちゃんに声を掛けるように、大きな声で何度も何度も彼の耳元で繰り返した。

「がんばって、直ぐだから。さあ、頑張って立ってちょうだい」

彼は無意識なのか、それでも足に僅かな力を掛けて起き上がろう

としてくれた。

何かをしなければいけないという意識が、彼の中にあつたのかも  
しれない。

あたしはそれを利用して、半ば引きずるように彼を部屋へと連れ  
込んだ。靴は履いたまま上がって、やっとの事でベッドに放り投げ  
るように横たわらせた。

あたしの力で、優しくそつと寝かせる事なんて到底出来はしない  
もの。

それから靴を脱がせて、上着だけを剥ぎ取るように脱がせた。

氷嚢か水枕…… 彼の部屋を見渡して、そんなものは無いだろう  
と思った。

探しているより、とつて来た方が早い。

アパートの階段を駆け下りて自分の家に戻ると、台所で水枕に氷  
を詰め込んだ。

再び家を出る時、ちょうど母親がパートから帰って来て、水枕を  
片手に玄関を飛び出るあたしを怪訝な目で追っているのが判った。

「ちょっと、千里？」

玄関口で、背中から母が声を掛けて来た。

「後で話す」

あたしはそう言って、そのまま駆け出した。

アイスノンを持ってきたり、風邪薬を取りに行ったりと、アパー  
トと自分の家を何往復かして、ひと通りのなすべき事が終わる頃に  
は汗だくになっていた。

何処から入ったのか、気が付くとネコが部屋の中にいた。良く見  
ると、ベランダへ通じる窓が少し開いている。

それにしてもここは二階だ。

ベランダに出て外を眺めると、隣の家から太い木が枝を伸ばして  
いる。この木を伝って、あのネコは二階に出入りしているのだ。

台所にあつたネコ缶とキャットフードを与えて、あたしは暫しの  
間、子供のように寝入る彼を見つめていた。

なんだか疲れて、アパートの階段さえ直ぐには降りる気になれなかったのだ。

良く見ると、写真雑誌などが散乱して、部屋の中は妙に散らかっている。思わず、座った場所から手が届く範囲の物を少しだけ整理して片付けた。

ふと外に置きっぱなしだった彼のバックを思い出して、重い腰を上げて部屋の中へ持ち込んだ。何が入っているのか、意外と重くてビックリした。

あたしの通学用の鞆とは大違いだ。

一度家に帰って夕飯を食べた。

「お母さん、解熱剤ってなかったっけ」

「解熱剤？水枕持って、あんた何してるの？」

「お向かいの人が、一人行き倒れて」

「行き倒れ？」

母はポカンと口を開けてそう言った。このすつとぼけた所は、ほんつとに、あたしとそっくりだ。

「あ、いいの。別に」

あたしは去年インフルエンザにかかった時に処方された解熱剤を探した。

机の引出しの奥に、クシャクシャになった薬剤袋といっしょに見つけた。どう考えても、使用の期限は切れていそうだが、何も飲まないよりはマシだろう。風邪薬と水枕だけであるの高熱が下がるとも思えない。

夜中、両親に気付かれないように、こっそりと家を抜け出して、アパートへ向かった。

頭を冷やされて、体を温めて、無理やり口から流し込んだ市販の風邪薬も少しは効いたのか。彼は、あたしのいる事に気が付いたようで、目を細く開けた。

「何でキミがここに？ここは、俺の部屋かい？」

頭が混乱しているようだった。

簡単に事の成り行きを説明して、彼に着替えるように言うと、台所でおかゆを作ったあげた。

知らない台所で鍋をいじるのは、妙な気分だった。

翌朝、彼のアパートを覗くと、熱はだいぶ下がっていた。

「去年の薬でもちゃんと効くのね」

「えっ？」

「ううん、何でも無い」

あたしは、再びおかゆを作って、ネコに餌を与えると、学校へ向かった。

外は、梅雨の訪れを感じるような湿った風が吹いていた。

### 【第3話】

あたしは、何となく毎日彼を見舞い、彼の部屋でネコと遊んだ。

ネコの名前は小吉と言っらしい。何となくつけた名前だそう得意味は無く、その名を呼んだからと言って駆け寄ってくるわけでもなかったが、名前の在るのもいいものだ。

小吉を膝の上で転がしながら、小さな声で名前を呼び、そう思った。

「ネコ、好きなんだな」

横のベッドで眠っていたと思った彼が、不意に呟くように言った。

「あたしの死んだネコにそっくりなの」

「そうか…… じゃあ、俺が助かったのも、ネコのお陰かもしれないな」

「そうかもね」

あたしは遠慮なく、そう言って笑った。

「キミの部屋…… この通路から望遠レンズを向けている奴を見かけたんだ」

「えっ」

「ここから200ミリでも使えば、下着の模様まで写っちまうぜ」

あたしは、その言葉にぞっとした。

「俺が捕まえて、シバいてやったよ。デジカメだったから、メモリを全て消去させた」

「ここに住人？」

「いや、違うらしいが、201号室の友人だとき。きつと、覗けるって話を聞いて来たんだろっうな」

「そう…… 有難う御座います」

あたしは、わざとかしこまって頭を下げた。

「いや、いいよ。同じカメラを扱う者として、許せなかったから。

それより、礼を言うのはこっちの方さ。看病までしてもらって」

彼はそう言って微笑んで「ほんと助かったよ。ありがとう」

まだ少し青ざめた、病人の微笑みに、あたしはテレ笑いを返した。四日目の朝、彼は病み上がりのまま、ふらつく足取りで仕事場へと出かけていった。アシスタントの下積みの分際で、長々とは休めないのだと言う。

それでも、あたしは、アパートの通路に面したガス給湯器のハッチの陰に隠してあると言う、スペアのカギのありかを教えてもらい、彼の部屋へと忍び込んでネコと戯れるのだった。

小吉は、フラフラと散歩をする時間意外、彼の部屋のベランダがお気に入りらしく、あまり通りで見かけない。だから、あたしがこっとうして遊びに来るのだ。

そのくせ人恋しいのか、夕方あたしが行くと、向こうから寄り添ってくる。

たぶん、お腹が空いているせいだとは思って……

あたしは、彼の部屋で、ネコを横目に宿題をしたりして、時間を過ごす。何故かその部屋は居心地がよかった。

自分のいる空間が汚いのは嫌なので、何となく片付けをしたり、掃除をしたりもする。

「なんか、あんまりきれいになると、自分の部屋じゃないみたいで、落ち着かないな」

彼は、時々そんな事を言う。

一度、現像を頼まれていたフィルムが何処かへいったと、あたしと彼は大喧嘩をした。

「キミがやたらと片付けるから判らなくなるんだ。俺は何時も、自分が判り易い場所へ置くんだ」

「ちゃんと、整理棚があるんだから、そこへ入れればいいでしょ」

結局、その現像前のフィルムは冷蔵庫の中から見つかった。使用前のフィルムをよく冷蔵庫に保管するのだが、どうやら何かの拍子に紛れ込んだらしい。

でも、どうしてフィルムを冷蔵庫に保管するのだろう。

彼に訊いてみても、冗談混じりで

「生ものだからさ」

なんて言うだけで、ちゃんと教えてくれない。

そんなこんなで、あたしが彼の部屋に通うようになったのが梅雨入り前。

何だかんだと、もうじき梅雨は明けようとしていた。

学校が試験休みに入ると、ますます彼の部屋にいる事が多くなり、読書などをしたりして時間を過ごし、時々、仕事から帰った彼と一緒にご飯なんかを食べたりする。

お陰で、少しだけ料理が得意になったかな……

この前、お風呂から上がってリビングの前を通った時

「千里、最近元気になったな。ネコがいなくなってる、ずいぶんしよ氣てたみたいだったが」

「なんか、お向かいに住むネコの世話をしてるそうですよ」

「なんだ、ボーイフレンドでもできたのかと思った。まあ、アイツが元気ならいいさ」

父と母がそんな話を話していた。

あたしの中では、あくまでも、ネコと遊ぶ為にあそこへ行く。特に深く考えた事は無かったけど、そうに違いないのだと思っていた。だって、彼と初めて会った時だって、全然ときめかなかつたし、腕に抱えたネコだけにしか目がいかなかつたんだもの。

彼を抱えてベッドに運んだ時だって、無我夢中で力をいれて抱えるあまり、あたしの胸に彼の頭が食い込むほど押し付けられても、別に何も感じなかった。

## 【第4話】

梅雨明け宣言を、朝の天気予報で聞いた。

それを聞いただけで、あたしの心は少しだけ晴れやかで、だからどうしたと言うわけでも無いのに、これから本格的にやって来る夏の陽射しを想像して心が高鳴った。

何時ものように玄関を出ると、青空からは既に熱い紫外線が注がれていた。

今日は、終業式だ。

門を出ようとした時、目の前には彼の姿があった。彼は今までと変わりなく、優しい笑みであたしを見つめていた。

「田舎のオヤジが倒れてさ。俺、急に帰ることになったんだ」

「何時戻ってくるの？」

また、チョットの間小吉の世話を頼みに来たんだと、あたしはそう思った。

「いや…………… もう、戻っては来ないよ」

「えっ」

あたしは、ポカンとして彼を見つめた。一瞬で頭の中が真っ白になった。

無意識にでた言葉は「引越しは？」

「急だから、全部引越し屋に頼んだ。午後にも来ると思うよ」

彼は、両手で抱いた小吉をあたしに差し出すと

「こいつはキミにあげるよ。田舎のばあちゃんが、ネコアレルギーでさ」

そんな笑顔で言わないで…………

「死んだネコの代わりといったら何だけど、キミになついているから違う…………… そうじゃない。そうじゃないよ。」

「ありがとう」

あたしは、彼につられるように、笑顔で応えて小吉を受け取った。

「じゃあ、元気で」

彼は、まるでその辺へ買い物にでも行くみたいに、気軽に声を掛けて歩き出した。

違う…… 違うよ。

あたしは…… あたしは……

彼を抱えた時の胸の感触が蘇って、今更シクシクと疼いた。

確かに小吉に会いに行っていた。でも、たぶんそれだけじゃないよ。それだけだったら、こんなに胸の奥が締め付けられないよ。

「あたしは……」

その声に、彼は一度だけ振り返って、軽く手を振った。ほんとに軽く。また今夜会えるかのように。

あたしは、その先の言葉を叫ぶ事も、彼の背中を追いかける事もしなかった。

ただ小吉を抱いたまま、彼が先の路地を曲がるまで、その後ろ姿を見つめていた。

遠のいて行く彼の後ろ姿は、まるで幻のように溢れる涙で朧に霞んでいた。

終業式が終わって、友達のカラオケの誘いも断って、あたしは走って、走って、走り通して帰宅した。

積み込まれる彼の荷物を、最後に人目見たかったから。いいえ、業者の人に言伝を頼もうとしていたのかもれない。

終業式の最中、校長先生をつまらない話を聞き流している間に、あたしは考えた。

彼はずっとあそこにいるのが当たり前で、必ずあそこへ帰って来て、小吉を抱くあたしに優しく微笑んで、それが当然のように何時までも続くと思っていた。

何時までも続くはずの無い現実を、突然突きつけられたあたしは、ぐるぐると渦巻く意識の欠片にすがり付いて、心の奥を覗き込む。

人伝だったら言えるかしら…… 「あなたが、好きです」

家の前の通りまで来ると、引越しセンターのトラックが、反対側の角に消えるのが見えた。

大きく肩で息をしながら、呆然とその景色だけを見つめていた。あたしは何時でも一足遅れなのだ……

がらんどこの206号室。部屋のカギはかかっていたいなかった。

何も無い部屋は意外と広くて、彼の匂いはもう消えていた。

あたしは、自分でも気付かないうちに、彼を感じる為にこの部屋へ来ていたのだ。

そして、この部屋の不思議な居心地の良さは、彼を感じていたからなのだ。

ふと窓辺に視線を移すと、ベランダには小吉の姿があった。

主のいなくなった、何時もの場所に佇む小吉の姿を見て、何だかとても悲しくて、頬を伝う涙が止まらなくなって、まるで迷子になった小さな子供のように、あたしはその場にうずくまってしまった。

夕闇に包まれる頃、大家さんが部屋のカギを取りに来るまで、あたしは小吉と一緒にその部屋に佇んでいた。

ドアを開けた大家は、暗闇の奥にうずくまる人の気配にしこたま驚いていたっけ。

お互いにもあまりにも自然体でいられる相手は、本当は一番大切なのに、失うまでそれに気付かないのだという事を知った。

絹に落とした水滴が静かに広がって染み渡るように、それは自分の知らぬ間に、こころの内側を覆い尽くして大きくなるのだ。

ときめかない恋もあるのだと知って、あたしは自分がほんの少しだけ大人になったような気がした。

一ヶ月もしないうちに、あのアパートの206号室には新しい住人が入居したようだ。

今年の夏も、あたしにとってはこころ踊るような夏ではなかったけれど、見上げる青空が、以前とは 少しでも違う蒼に見えるよう

になったのは気のせいだろうか。

あたしは今でも、学校から帰ると部屋のカーテンを閉めて着替えをする。

それから何時も、小吉を膝の上に乗せて背中匂いを嗅ぐ。

小吉のぽかぽかした陽だまりのような背中からは、チヨットだけあの人の香りがするから。

陽だまり      E N D

【第4話】（後書き）

短編に挑戦してみたのですが、結局4部に分かれてしまいました。少しづつ短編にも挑戦したいと思います。ご感想はお気軽にお書き込みください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2110b/>

---

陽だまり

2010年10月8日15時47分発行